漫画時評

Volume. 23

時には気まぐれな美術館のように

村上知彦

人は、毎日まんがばかり読んで暮らしている訳ではない。そのあたり前のことをときどき思い出してみないと、まんがもまんが批評も、おかしなところへ行ってしまうのではないか。

そんなようなことをふと思ったのは、洲之内徹の「気まぐれ美術館」という本を読んでいた時だった。東京・銀座の現代画廊の主人で、一九八七年に亡くなった著者が、七四年から「芸術新潮」に連載していた美術随想で、昨年の秋に新潮文庫に入ったのを、このごろいつも持ち歩いて、電車の行き帰りなどに少しずつ拾い読みしているのだ。

というのも、画家だった父を昨年亡くして、一周忌を済ませた今年のはじめあたりから、美術館や画廊へ足が向くことが多くなったからだ。といってもべつに、ぼくが観て歩く展覧会が、この本に直接に関係があるわけではない。ただ、そのように展覧会を観て歩きたいぼくのいまの気分に、この本をいつもポケットに入れて、ときどき拾い読みするというようなことが、妙にしっくりくるのである。

洲之内徹の文章は一見とりとめがない。絵や画家のことを語るのかと思えば、日々の出来事や、出あった人や、旅の風景の話が延々と続いて、一向に美術や芸術の話にならなかったりする。だがそれが、この人にとっての美術や芸術の話なのだということが、読んでいるうちに自然と納得できる。

絵や器や仏像は、そういったこの人の日々の暮らしの中にすんなりと収まっていて、ことさらに美術品であることを主張したりはしない。そうして、そんなふうに何気ない話の流れの中で、この人がほめたり気に入ったりしている絵のことは、なんだかとても気になって、いちど見てみたいと思ってしまうのだ。

画廊の主人といえば、つまり画商であるわけだろうが、この人が気に入って集めたり、展覧会を開いたり、人に奨めたり、あるいはたんに身の回りに置いておいたりすること自体が、すなわち批評的行為でもあるわけだ。ぼくが、まんがについてやりたい批評というのも、つまりはそんなことなのかもしれないな、などと思いながら展覧会をめぐっていると、美術館の学芸員というのもまた別のかたちで批評行為を行なっているのだということに気がつく。

学芸員というのが、作品を分類し分析する、いわば批評家や研究者に近いものだとすれば、画商や画廊のそれは作品を商品として扱いながら、自分自身を含むその鑑賞者や所蔵家と作品との関係をコーディネートする、つまり編集者や書店といった存在に似ているようだ。編集者や書店の仕事が、ある種の批評的行為を含んでいることはまえから意識していたが、そうか、ぼくは好きな画家の個展を企画したり、その画廊の店番を好きな絵

©秋田書店・井浦秀夫（ヤングチャンピオン連載中）

に囲まれてぼーっとしていたりするように、批評をしたいのだというのは、なかなか新鮮な発見だった。

「漫画時評」という欄を担当しながら、いつも前置きばかり長くて、なかなか本題に入れないので、申し訳なく思っている。ただぼくは、結論が分かってから書きだすタイプではなくて、自分でも分からないことを探り出すために書いているのだし、『ガロ』ではそのへんをなるべく正直に出したいと思っているので、どうしてもこうなってしまう。青林堂の手塚さんから、今回の時評で取り上げる作品を知らせてほしいと電話があって、井浦秀夫が『ヤングチャンピオン』に、カンパニー松尾の原作で連載している「職業　AV監督」が前から気になっていたので、そう答えておいたのだが、なぜこの作品が気になるのか、実は自分でもまだよくわからない。

　この間まで、手塚治虫文化賞と講談社漫画賞という、ふたつのまんが賞の選考に加わっていた。どちらも先ごろ発表されたが、手塚文化賞のほうは本賞が「ドラえもん」、ぼくが推した萩尾望都の「残酷な神が支配する」は優秀賞だった。朝日新聞が主宰して新しく創設されたまんが賞の、第一回の受賞作が「ドラえもん」というのは、確かに誰からも文句は出ないだろうが、あまりにまともすぎて面白くも何ともない。それよりは、ベテランでなお果敢に問題作に挑んでいる萩尾を本賞に推し、現在の日本まんがの最前衛といえる、望月峯太郎の「ドラゴンヘッド」か松本大洋の「ピンポン」あたりを優秀賞にすべりこませるというのが、この賞を選ぶにあたってのぼくの戦略だった。

　結果、惜しくも1点差の次点となってしまった「ドラゴンヘッド」は（手塚文化賞は、投票による順位のみで賞が決まり、選考会は開かれない）、講談社漫画賞では、ぼくを含め五人の選考委員が強力に推して、みごと一般部門の受賞作となった。やはりノミネート作となっていた「ピンポン」は、ここでも涙をのんだわけだが、これもいずれ来年の小学館漫画賞あたりでは、また候補に上ってくるような作品であることは間違いないだろう。

　どちらの賞の最終候補にも上らなかった作品の中にも、気になるものはもちろんいくつもあって、例えば福本伸行「カイジ」などが今年の講談社の候補に入っていなかったのはちょっと解せない気がした。ただそれは、昨年「ドラゴンヘッド」の名前が候補作の中に見つからなかった時にも同じように感じたことで、どこかの時点でスポットを浴びずにはおかないだろうという予想は、つけることができる。漫画賞が本来、そのような疑問やはがゆさも含めたものであるほかないなら、せめて見当外れだけは犯さぬよう心がけるのが務めであろうと理解してもいる。

　井浦秀夫の「職業　AV監督」は、漫画賞といったかたちでの評価のされ方とは、ほぼ無縁の作品に思える。それが、この作品のことがずっと気になっている理由の一つかもしれない。漫画賞の選考という仕事をしながら、ぼくはこの作品をそのいわば批評的な仕事の中で、どう扱えばよいのか思案してしまう。

　むろん候補にも上ってこない作品を、扱うもなにもないといえばそれまでだ。だが、賞を選ぶということは、ベストの作品を決めればそれで終わりというものではない。むしろそれをきっかけに、選べなかった作品や選ばなかった作品について、いろいろ思いめぐらす機会を得る、ということのほうが、選ぶがわにとっては重要であったりもするはずなのである。「職業　AV監督」は、ぼくが漫画賞を選んだり、候補作を推薦するアンケートに回答したりする場合に、あらかじめ除外してしまうタイプの作品である。それは、作品の客観的評価からそうするというよりは、むしろ作品への個人的嗜好が勝ち過ぎて、そのような評価の場に並べることすらそぐわないと、感じられてしまうためだといえる。

　これは、勤めていたテレビ番組制作会社が倒産し、右も左も分からぬまま二十歳でAV界に入ったカンパニー松尾の、

AV監督としての自らの体験を描いた、自伝風エッセイともいえる作品である。一言でいえば「業界内幕もの」ということになるのだろうが、ドキュメンタリーの装いを持った青春まんがの色合いが強い。適度に軽く、適度に個性的な井浦秀夫の絵は元来、青春コメディーを描くのに適していた。それが、ここでは浣腸や放尿といった生々しいAVの制作現場を、過度に露悪的などぎつい表現に陥ることなく、むしろ淡々とした調子で描いて、一人の平凡な青年の職業人としての自立の過程のドキュメントという、作品のトーンを決定づけている。

うんこやレイプといった、言葉や場面が頻繁に登場するのだが、それらの素材から受ける印象とは異なり、作品全体は内省的な青年のモノローグによる青春ドラマのように進行する。描かれる女性のヌードやセックスシーンも、どこか生々しくなく、一歩引いて眺められたような、整理された印象を受ける。それは、娯楽作品として見た場合は、むしろ弱点でもあるだろう。同じ主題を、もっとエロチックに、もっとグロテスクな表現を交えつつ展開することも可能だろうし、そのほうが読者に与える違和感と、その反動としての主題の説得力は深まったかもしれない。

あえてそのような、表現上の過激さを排除することで、AV業界を舞台にしながら、きわめて端正で物静かという、奇妙な作品ができあがった。登場するAV女優やスタッフたちも、少しきれい事にすぎるのではないかと訝りたくなるほどに、いい人ばかりである。そして、普通なら物足りなく思わせる材料であるはずのそれらのことが、この作品に限っては妙に心地よく納得できるのである。

過激な表現が望みなら、カンパニー松尾の撮ったAV自体や、この作品にも名前の出てくるV&Rの他の監督の作品を見てみれば済むことに違いない。ここで描かれるのは、もっと曖昧で矛盾した、漠然としたひとりの人間の、心の揺れや翳りや昂まりだ。それを表現するために、井浦秀夫の明るさの中に適度な陰影を帯びた絵と、主観を巧みに抽象化するまんがという方法が必要だったのだ。

実際、井浦秀夫はこのエッセイともドキュメントともつかない青春物語を、翳りを帯びた柔らかい女体のリアリティと、呼吸のよいユーモアにあふれた文体とでまとめあげ、ドキュメンタリーまんがの一つの新たなスタイルを作り上げた。かつて、コメディタッチから一転して、カルト宗教を主題としたシリアスな作品「少年の国」に挑んだ経験が、ここにきて豊かな実を結んだといえる。

このような、いわば「引いた」表現構造を持つ作品は、漫画賞のような華やかな場に持ちだすよりは、手元において静かに愛でていたい。その訴えかけるものを高らかにふれまわるのではなく、日々の暮らしの中で自分自身にしっかりと受け止めてゆきたい。そう思わせるのがたぶん、この作品の持つ「力」なのである。

世間の評価に惑わされることなく、自分の目で見て体で感じたものばかりを集めた「その一つ一つに彼の愛情と、人生の重みが秘められている」（白洲正子「さらば『気まぐれ美術館』」）洲之内コレクションには及びもつかないが、ぼくもまた気まぐれな美術館のように、自分の目と心に忠実に、まんがを読み語っていきたいものだ。

※　※

〈お知らせ〉
「気まぐれ美術館ー洲之内徹と日本の近代美術」〜6月1日：東京・目黒区美術館／6月7日〜7月21日：神戸・兵庫県立近代美術館

※米沢嘉博、阿部幸弘、村上知彦、呉智英の四氏の漫画時評を毎月交代掲載します。（次回は呉智英氏の予定）